

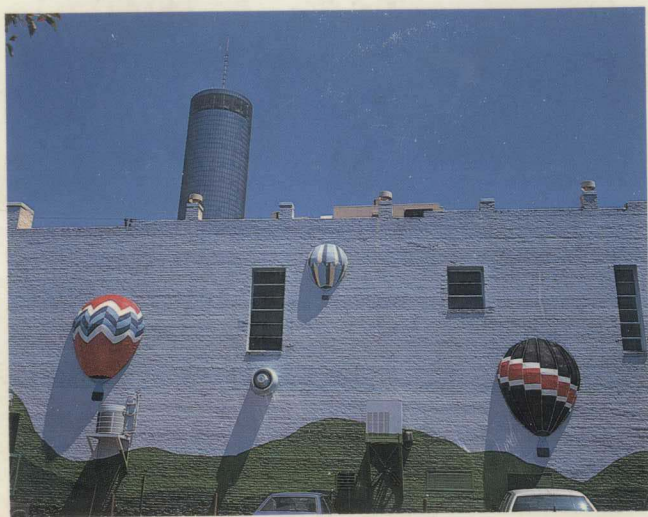
気ままな幸福論

気ままな幸福論

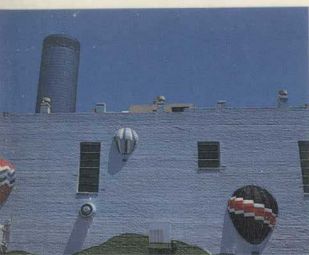
木村治美



木村治美



気ままな幸福論



気ままな幸福論

木村治美



著者紹介

昭和七年（一九三二年）東京生まれ。東京教育大学英米文学科卒業。同大学院で文学研究科博士課程を修了。現在、臨時教育審議会委員。昭和五十二年（一九七七年）『黄昏のロンドンから』で第八回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。

気ままな幸福論

一九八六年五月六日 第二版第一刷発行

著者 木村治美

発行者 江口克彦

発行所 PHP 研究所

東京事務所 ○三―二三九―六二二―

千代田区三番町三番地一〇郵便番号一〇二一

京都本部 ○七五―六八一―四四三―

京都市南区西九条北ノ内町一一郵便番号六〇一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所

© Harumi Kimura 1986 Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えをせうたできません。

目次

エッセイ教室の素敵な紳士たち 7

夫婦のあいだは… 21

逆境という名の幸せ 34

失って得るもの 47

外国語音痴の幸せもの 61

選べる自由と選んだ責任 74

万年筆のよろこび 88

古城のバカンス 100

男の沽券と女の挑戦 113

「畑を耕す」楽しさ 126

父のつぶやき 139

教育論議の渦中で 153

十年目の市民大学 166

紺屋のあさって 180

自分の時間を使う自由 194

あとがき 208

装幀 龜海昌次

気ままな幸福論

エッセイ教室の素敵なお紳士たち



さるカルチャー・センターで「エッセイの書き方講座」をもって、かれこれ四年になります。私もがんばりましたけれど、受講生も熱心でした。初回からずっと続けて出席しているひとさえます。五十人の定員のほとんどは各年代にまたがった主婦ですが、ただ今のところ、男性が三人います。今日はその三人の男性について書いてみたいと思うのです。

私が大学生だったのは、残念ながら三十年も昔のことになりました。女子の大学進学率がだんだんに高まり、しかも男女共学がはじまっていた。それにつけても男女共学とは古めかしいことばですね。いま共学は当り前すぎて、誰もとりたてて口にすらしません。が、当時はなんと斬新で魅力的なひびきをもっていたことでしょうか。それほど特別なことでした。

そういう時代に私がなぜ共学校を選んだのか、よくはわかりませんが、世間のひとが奇異な目で見たのは確かでした。第一志望である共学校と、もう一つすべり止めに受けた女子大の両方に合格したのを知って、なにかと口うるさい近所の奥さんがとんでやってきました。

「そりゃT女子大のほうがいいにきまっています。あのお嬢さん学校を出ればお嫁に行くときだって立派なもんですわ」

私が気持を変えないのを知って、奥さんは、なんてばかな、という顔で帰っていききました。

入学試験にそなえて、私はある医学部の大学院にいた家庭教師についていました。かれ

は私が入試に合格したとき、お祝いにロマン・ロランの『魅せられたる魂』全十巻を贈ってくれました。その第一巻には、

「実り多き人生をお歩きください」

という毛筆書きのことばがそえられていて、いまなお私の想い出の蔵書の一冊になっています。しかし、『魅せられたる魂』を本当に理解したのは、それから何年も何年もたつてからのことでした。年齢的にも、時代的にも、この本を読みとる情況はその頃はまだとのつていなかったようです。

何年かたって読み返し、書いてあることが本当にわかったときの気持は、この本を読んだことのあるかたにはおわかりいただけるでしょう。物語そのものよりも、ロマン・ロランという男性作家が、これほどまでに女性に理解を示したということ。すでにあの時代には、そして口では女性の自由と平等をいいながら、本質的にはアンネットをまったく理解しなかった男を、同性として組上にのせたということ。「男性に読ませたい本」というアンケートがあつたら、私は迷うことなく『魅せられたる魂』をあげるでしょう。女性に おすすめしたいのはいわずもがなです。

さて、その『魅せられたる魂』を私に贈ってくれた家庭教師の先生さえ、なにか不思議そうにこういったものです。

「なんで女子大の前を通りすぎて、男の大学に行くのです？」

私自身も、これらの声をきいて、動揺しなかったわけではありませんが、父と母は平然としていて、したいようにさせてくれました。

なぜ世間の思惑に逆らって共学校を選んだのか、本当の理由は自分でもわからないのです。こんなことが原因かなと思われるのは、子供のときから聞かされていた母の口癖でした。

「女なんてつまらないものだよ。家に閉じこめられて、やりたいことはなんにもできないのだからね」

それから、自分たち夫婦のことを、こうもいつていました。

「結婚したときは対等に小説を論じあったりしていたのに、むこうは社会に出てどんどん先へ歩いていく。こっちは家の仕事をしているうちに、差がつくばかりなのよ。なんののかんのいったって男は偉いわよ」

いま母は八十をとうに越しました。その年齢を考えれば、こういう問題意識をもっていただけでも、かなり時代を先取りする女性であったとはいえるでしょう。だからその無念さが、女なんてつまらないという思いにつながったのでしょうけれど、そう聞かされた娘としては、

「それなら男の世界に入りたい、それが許される時代になったのだから」

と思つたとしてもおかしくはなかったでしょう。

共学は始まったばかりで、いまでこそ女性優位の英文科ですら、そのときは四十五人中女子学生は三人きりでした。全校でかき集めても、女子は百人いたかないかの少人数では、共学とは名ばかり。ついでながら私がいま教鞭をとっている工業大学は、近年とみに女子学生がふえたとはいいながら、やはり工学部のせい、クラスの二、三人がよりそうようにしています。

ほんとうのところ、私はやっぱり心細かったですね。男性集団の中の少数の女性であるということは、その頃は年齢的にもたいへんなブレッシャーでした。

「いや、ぼくたちこそ、女子学生にブレッシャーをかけられていたんですよ」

と、先日、二十数年ぶりに再会した男の同級生がいたので、男の側からはそういう見方もあったのかと、あらためて初期の男女共学をとらえなおしてみたい気持ちになったものです。

男の中の少数の女子学生が、いかに心細さ、孤独感、プレッシャーにさいなまれていようと、それらが、女ばかりの園よりも、より高度な世界にいるという優越感、満足感で裏打ちされていたのはまちがいありません。先ほどの家庭教師の先生が、そのときのついでの話に、

「男の大学には女の人が入ることができるのに、女子大には男が入れないのは、不公平ですね。おかしいですね」

と感想をもらしたときにも、私はちっともおかしいとは思いませんでした。女子大に入りたい男がいるはずがない、男の大学のほうが高級であるからこそ、女性は入りたがるのだから、とひそかに思っていました。

そう、平等だの同権だのを口にしながら、女性たちは心の奥底で、男性の優位を認め、そこに入りこむことで、平等と同権をかちとろうとしてきたのが、これまでの平等への動

きでした。あらためて考えてみると、家庭教師の先生はまるでロマン・ロランのように、女たち自身よりもはるかに対等な目で女性を眺めていたのかもしれない。女子大に男子学生を入れない不公平については、いまでこそ、そこで気がつく人が出てきましたけれど、あの時代にすばつといいきった感覚はじつに鋭い。結局、ものの本質を見抜くのは優位に立っている者のゆとりの精神ではないかと思うのです。

さて、時は一気に三十年流れ去りました。私のエッセイ教室に話をもどしましょう。五人近い女たちの集団の中の、たった三人の男性。まさに情況の逆転です。しかも講師まで女性です。私には、この方たちの居心地の悪さが充分に想像できます。具合の悪さといったほうがよいでしょうか。この方たちの抵抗感は、かつて私たちが男性集団の中に入っていたときとは、またべつのものであるにちがいありません。たしかに、一度教室に顔を出しただけで、女ばかりであるのを知って、それきり出席しなくなった男性も過去にいなかったわけではないのです。

それでもいまの三人を含む何人かの男性は、主婦たちに混じって、出席し続けました。

ほとんど欠席もせず、提出日にはきちんとエッセイを書いてくる。教室の同人誌にも投稿する。

Aさんはもう七十を越えています。そう自己紹介したとき、教室中が、「えっ」と驚いたほど。まるで五十代としか思えません。戦争体験を書き残したいのだそうです。そうしないと戦死した戦友に申しわけないと思うのだそうです。

それはそれとして、私が心うたれるのは、彼の授業を受ける態度です。遅刻したことは一度もありません。私の話すことを、熱心にメモにとるのも彼だけです。合評形式の授業の進め方をしているのですが、自分の作品が取りあげられると、容赦ない主婦たちの批評に、

「はい、はい」

とていねいにうなずいています。そして、

「ありがとうございます」

はじめ、ずいぶん堅苦しいエッセイを書いていました。大上段にかまえて戦争を語ったのが第一作だったと思います。エッセイの初心者には、男にも女にもだいたいそういう傾